



野田聖子著

# 産みたいと願う立場から指摘した 不妊治療を取り巻く社会制度の不備

現在、少子化問題があちこちで議論されているにもかかわらず、不妊治療についてはあまり触れられていなかった。

**日** 本で不妊治療をしているカップルは四七万組いるといわれており、生殖医療の進歩によって不妊が可能になっていた妊娠・出産が可能になってきた。

一年間に生まれる赤ちゃんは一一〇万人前後であり、そのうち、体外受精で生まれているのは一万人強。すなわち、生まれてくる赤ちゃんの一分は不妊治療の結果生まれてきているのである。

## 実態すら知られていない

ところで、不妊治療はあくまで個人の自由な選択という考え方から健康保険の対象外となっている。一回当たり二〇万〜四〇万円の治療費を、繰り返し払えるというのも現実である。このように実態が知られ

ることの少なかつた不妊治療の体験を、現職の国会議員である野田聖子氏が勇気を持って綴ったのが本書である。本書の最大の意義は、不妊という障害を取り除く手助けを政策のレベルで考えてもいいのではないかと、いうことにある。



新潮社  
1200円

また、第三者からの卵子提供などを認める生殖補助医療法案が、今国会での提出を見送られたように、国会議員の関心は低く、意見の一致も見られていない。このような現実に対しても、本書はいくつかの問題提起をしている。不妊というデリケートな問題に対して、患者の心のケアなどまだまだ改善すべき点があること

も明らかにされている。

生殖医療に関しては、代理母出産の禁止、兄弟姉妹間での精子や卵子の提供の禁止、不妊治療は婚姻届を出したカップルのみを対象とする、など議論の余地があるルールが不妊治療をさらに困難なものにしている。

実際、欧米では医療技術の進歩に対応して、はるかに自由な選択肢が与えられており、倫理上の問題もより現実的に議論されている。

なぜそんなに無理して子どもを欲しがるのかという疑問もあるかもしれないが、本書は不妊治療が生命や人間の尊厳を再考する契機になっていることを示唆している。

評者

北村行伸

一橋大学経済研究所教授